三角の山 ▲ 丸山健二

0993-302610-7384

三角の山

丸山健二

文藝春秋

《著者略歴》
昭和十八年長野県飯山市に生れる
昭和三十九年国立仙台電波高校卒
昭和四十一年「夏の流れ」で
第二十三回文學界新人賞受賞
昭和四十二年同作品で
第五十六回芥川賞受賞

三角の山
昭和四十七年十二月十五日　第一刷
七八〇円
著者　丸山健二
発行者　樫原雅春
発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
TEL　東京二六五—一二一一
郵便番号　一〇二
印刷　理想社印刷所
凸版印刷
製本　中島製本
万一落丁・乱丁の場合はおとりかえ致します
© Kenji Maruyama 1972　Printed in Japan
0093—302610—7384

三角の山

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

三角の山　目次

三角の山……5
満月の詩……121
夜は真夜中……157
風の友……191

装幀　山本美智代

三角の山

朝一番の急行列車が時刻表の通りに到着して、姉は数人の登山客といっしょに広場へ現われた。すると、その場に居合せた町の連中――早出番のタクシーの運転手が六人と新聞配達の老人が三人だけ――が一斉に首をまげ、やりかけの仕種をとめて、彼女を見た。もしもっと大勢の人間がいる昼間だったとしても、おそらく一人残らず同じようにしたであろう。実際、こんな町へ姉のような服装で訪れる者は滅多になかったのだ。彼女が身につけている品はすべて純白で、しかも動くたびに水草のようにゆらめく余分な飾りがあちこちについていた。ハンドバッグも、靴も、全部そんなだった。

ぶしつけな視線を無視して姉は立ちどまり、ゆっくりと頭をまわして広場を眺めた。そして、

手紙で約束した場所、水鳥を飼っている金網製の檻の前で待っている弟を見つけると、こっちへ向って真っすぐに歩いてきた。山脈を越えて吹きおりてくる朝の冷たい微風が広場を横切るたびに、彼女の体を包んでいる軽やかな白い布の端がなびいた。タクシーの運転手たちは登山客と値段の交渉をしながら興味深げな眼ざしでまだ彼女を眺めていた。きっと駅員たちも同じようにして建物のなかから見ていたにちがいない。

広場に誰もいなかったら、ぼくは車の外へ出て姉を迎えただろう。運転席に坐ったまま、ぼくは身をよじって後の座席の扉を開けてやった。それから九年ぶりに会った姉の姿をろくに見ようともしないで、いくらか乱暴な調子でアクセルを踏みこんだ。本当はせっかくの新車をそんな具合に扱いたくなかったのだ。

姉はまだ一言も喋らないでいた。まるで仮面をかぶっているように見える濃い化粧の顔がバックミラーに映っていた。鏡を通して二人の視線が重なった。ぼくは一体何を言っていいのかわからなかった。そこでへたくそな愛想笑いをした。だが、彼女の方からは何も返ってこなかった。列車のなかが暑かったのだろう、無表情の彼女は汗ばみで耳に貼りついた髪を指先でほぐしていた。六月とはいえこのあたりの朝の冷えこみは厳しいので、列車は暖房を使用することがあった。

通りの両側を埋めている登山客めあてのみやげ物の店は、まだシャッターをおろしていて、人通りはほとんどなく、その気になりさえすれば町はずれまで一度もブレーキをかけないで行けそうだった。

空は曇って灰色でしかなく、そのうち雨が降ってきそうなあんばいだった。建て前をするには

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

最悪の天気になりそうだった。
姉は本当に村へ帰って暮すつもりなのだろうか。姉は本当に村に自分の家を建てるのだろうか。彼女は本当に姉なのだろうか。彼女の顔の輪郭は間違いなくかつての姉のものだが、ほかはすべて大きく異なっていた。九年前の夏の夜に着の身着のままで村を出て行ったときとは、すっかり変ってしまっていた。あまりにも変りすぎていた。車内にたちこめている匂いですら別人のものだった。ぼくが今乗せているのは実は姉ではなく、姉に似たどこかの女かもしれなかった。
だがぼくは思い出した。姉が家を飛び出したときの一件を思い出した。思い出したくはなかったが、突然思い出した。
姉はおよそ一カ月ほど口をきこうとしなかったのだ。それから二週間自分の部屋に閉じこもって家族の誰とも顔を合わせないようにした。二階にある彼女の部屋まで毎日食事を運んだのはぼくだったが、扉には鍵がかかっており、なかからはいつもすすり泣きが聞えてきた。一度夜中に便所へ行く寝巻き姿の姉を見かけたが、彼女はすっかり痩せ細って、歩くのもやっとのありさまだった。二日に一度くらいしか食事をとらなかったのだから無理はなかった。このままでは衰弱して死んでしまう、とぼくは母に教えてやった。しかし、母は返事をしなかった。父はといえば、ただ日の出前から畑に出て行き暗くなって家に戻る単調な日々を繰り返すばかりで、前にも増して無口になっただけだった。
いや、家中の者が必要なときでさえ押し黙って、気まずい雰囲気に堪えていたのだ。ある日、たしか夕食のときだったが、まだ中学生だった妹が突然茶碗を放り出して、わめきはじめた。泣

き叫びながら彼女は、もう学校へ行かないと言った。町の中学校へ転校させてくれと何度も訴えた。だが、誰も彼女の相手をしなかった。父は立ちあがってどこかへ行き、母は食事のあと片づけをし、ぼくは外へ出て一時間ばかりあてもなく村を歩きまわった。

実のところ、この問題をどうすれば解決できるのか、家族の皆が、世間知らずの妹でさえ承知していたのだ。しかし、それを口にする者はいなかった。直接姉に言う者はなかった。皆は長い長い沈黙に金しばりにあいながら、姉が出て行ってくれる日を心待ちにしていた。ぼくもそれが一番の方法だと確信していた。

村人たちと顔を合わせるのを最も嫌っていたのは、母だった。母はもう以前のようにあぜ道での立ち話や婦人会の旅行に参加しなくなり、外出するのは陽が落ちて暗くなってからだった。母はこともあろうに村中が寝静まった真夜中に田の草取りをしていた。当時の母の口癖はこうだった。《死んだほうがましだ》《もう村にはいられない》。しかし母は死ななかったし、村を出ようともしなかった。

ある晩を境にして、姉は急に泣くのをやめた。夜ふけに眼を醒ますと決って二階から姉のすすり泣きが聞えているといった習慣が、突然中断された。死んだのではないかとぼくは考えた。衰弱が著しくて遂に息をひきとったのか、あるいは梁に紐でもかけて首を吊ったのかと思った。いずれにしても今となっては、家を出て行くのと同様、それもたしかにひとつの解決方法にはちがいなかった。もっともそうなれば、娘の自殺といった恥の上塗りには到底堪えきれないで、母は口癖の通りに村を出たかもしれない。

姉は生きていた。長い間泣きつづけて暮したあと、彼女は夏の夜に家を出て行った。柱時計が十二時を告げている最中、二階の部屋で荷物をまとめるかすかな音がはじまった。姉の足が畳を踏む震動が階下へもはっきりと伝わってきて、彼女のしていることが手にとるように想像できた。階下で寝ていた四人は寝息をたてていたものの、本当に眠ってなどいなかった。とうとうくるべきときがきた、おそらく皆はそう考えて沈黙から解放される物音に聞き耳を立てていたのだ。

押し入れをかきまわしている音が聞えていた。いざとなると母はともかくとして、父か妹のいずれかがひきとめるのではないか、とぼくは思った。少なくとも妹くらいは泣いてむしゃぶりついて姉をひきとめるのではないかと予想していた。それを期待していた。しかし一方では、皆が眠ったふりをしていてくれるのを願っていた。

柱時計が十二時を打ってからまもなく、たぶん十五分も経ってはいなかっただろう、二階の物音がやんだ。北側の部屋で寝ていた父も、南側の部屋で妹といっしょに寝ていた母も、すでに寝息をたてるのも忘れていた。誰もが眠ったふりをやめて、二階の成り行きに全神経を傾けていた。階下の者たちは不安になった。姉が決心を変えたのではないかと心配して、とても怯えた。耳に入ってくるのは、田んぼという田んぼを埋めつくした蛙の声ばかりだった。ぼくは寝返りを打った。月の光で障子戸に庭の木立の薄い影が映っていたが、風がそよとも吹かないために、それはまるで絵のように見えた。

四人が諦めかけた頃、期待が裏切られたと考えるようになったとき、二階ではまただしぬけにひそやかな一連の物音がはじまった。ぼくは布団の上で背骨を震わせた。震えたように思えた。

息苦しさに堪えかねて、妹が咳払いをした。ふたたび期待が戻った。もはや疑う余地はなかった。姉はまさしく村を出て行こうとしていた。ときおり外が急に明るくなって障子に映った木立の影が濃くなるのは、稲妻のせいだった。

姉は静かに階段をおりてきた。手にした荷物が階段の手すりにぶつかるたびに、彼女の足音は次第に大きく聞えた。そして、廊下の床板のきしむ音が台所の方へと進んで、やがて茶碗の触れ合う音がしたかと思うと、冷えた飯をよそって食べる音がひとしきりつづいた。それが彼女にとって実家での最後の食事となった。今でもぼくはその音を忘れていない。姉は茶碗一杯の飯を長い時間かけて食べたあと、蛇口に口をつけて水を飲んだようだった。ついで聞えてきたのは母の財布から小銭を抜きとる音で、まるで本物の泥棒がたてる音みたいにぼくを怯えさせた。姉が持って行ったのは家族が二カ月たっぷり暮せる金額だとあとで母は言ったが、ぼくは信じなかった。母の嘘には皆慣れっこになっていた。

姉が玄関へ行ってよそゆきの靴をはこうとしたとき、ぼくはさかんに寝返りを打って咳払いをした。もうたくさんだった。それ以上辛抱できそうになかった。父か妹が起きて行ってひきとめてくれないものかと願わずにはいられなくなった。だが父も妹をひっそりとして、ぼくが躍起になってたてる物音に何の反応も示さなかった。

玄関の扉が閉められた。そして姉の足音が中庭を横切って小川に架けられた木橋の方へ向った。そのとき強い稲妻があって、姉の影がくっきりと障子に映った。手には小さな旅行鞄をさげていたが、それは彼女が父から直接買ってもらった唯一の品だった。姉は橋を渡って町へ通じている

県道へと歩いて行った。付近の蛙が次々に黙った。そして、家族は四人になった。

翌日、朝食のとき、四人はいつものように一言も口をきかなかった。だがその沈黙は昨日までのとは少し異なっており、重くのしかかってきたりは決してしなかった。妹は普段より十五分も早く学校へ行き、父は珍しく食事のあとのお茶を最後の一滴まで呑みほし、母は母でおよそ二カ月ぶりに陽のあるうちに畑へ出かけて行った。その日は町の工場が休みだったので、ぼくは家に残った。いつもの休日ならとっくに町へ遊びに出かけていたのだ。

その日ぼくは一日中川に面した東側の涼しい部屋に横たわっていた。もはや姉は家にいなかった。彼女は村から出て行った。彼女がどこへ行ったのかはおよそ見当がついた。少なくとも隣りの町なんかでないのは確かだった。彼女は彼女のことなど誰一人気にかけない遠くの大きな町へ行ったに相違なかった。おそらく彼女は二度と帰ってこないだろう、とぼくは考えた。彼女の顔を知っている者の前には現われないだろう。今頃彼女は都会の混雑した駅に降り立って、進む方角を思案しているだろう。あるいは、腹ごしらえのために食堂をのぞいて値段を調べて歩いているかもしれない。

その日ぼくは夕方まで眠った。そんなにぐっすりと眠ったのは久しぶりだった。眼を醒ますと、ちょうど太陽が三角の山——本当の名は別にあったが、村では誰もがそう呼んでいた——の鋭く尖った頂の後に沈んでゆくところで、オレンジ色の陽光が姉の部屋の窓を照らしていた。それから三日経った。それから三カ月経った。それから三年経った。すると四人は、もう姉のことを気にかけたりしなくなった。誰も姉の影に悩まされなくなった。以前ほど高飛車な態度には出なか

ったが、母はまたあぜ道での立ち話や婦人会の旅行に夢中になった。家族の一人が死んだのと同様、ぼくたちはすでに姉のいない家庭に慣れてしまっていた。四人とも例によって口には出さなかったが、ひそかに姉を見捨てていた。

新車の乗り心地はまったくたいしたものだった。その車が買えたのも実は姉のおかげだった。先月までぼくは運転免許しか持っていなくて、自分の車を持つ夢にうんざりしかけていた。そんなときぼく宛に長い手紙と現金書留が届いた。最初ぼくはとても信じられなかった。姉の書いた字を見たとき震えがとまらなかった。しかも、元の分教場の裏の広い土地を買ったのが姉だったとは。その土地に家を建てようとしているのがほかならぬぼくの姉だとは。彼女は自分の名前が表に出ないように非常に神経を遣い、一切の手つづきを代理の者に任した。だが今では、工事現場には堂々と姉の名前が記された看板が掲げられており、村中の者が知っていた。

姉からの手紙にはおよそこんな意味のことが書いてあった。建て前の日には行かねばならないが、一人ではとても無理だから手伝ってくれるように、と。ほかに頼む者がいないのだ。もし手伝ってくれたら礼はする。そして最後に、書留で送った金は当座の小遣い銭であると書いてあったが、それはぼくが半年間町の工場で働いてもらう金額と同じだった。

父も母も、今では結婚して隣りの町に住んでいる妹までがこぞって反対した。だがぼくは返事の手紙を書いた。勤めを休んでも手伝うつもりだと書いてやった。すると、一週間後にふたたび建て前に必要な事柄をこまごまと書き並べた手紙が届いて、一日遅れてまた現金書留が配達された。四分の一は謝礼としてぼくにくれると書いてあった。また、大工たちに酒を注いだり、茶を

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo